泌尿器科

与薬に関する一考察

発表者　伊藤まり子
武井弘子
泌尿器科一同

発表順序

Ⅰ　動　　機

Ⅱ　実施と経過

○実施方法①

○実施方法②

○実施方法③

Ⅲ　まとめ

Ⅰ　動　機

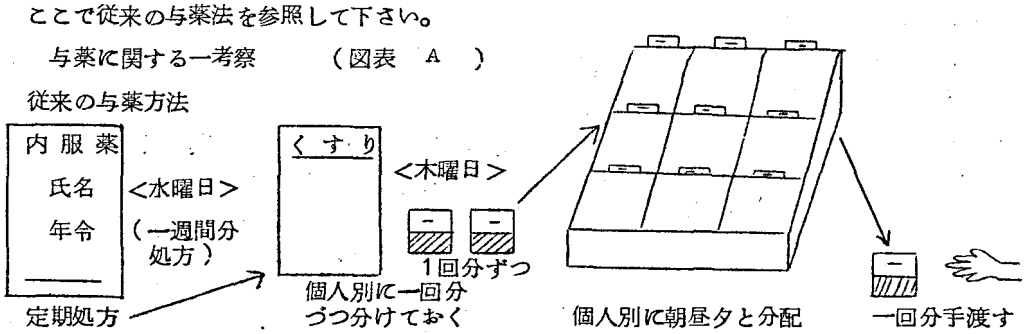
南病棟6階では、与薬に関して今まで、一週間分処方されたものを一回分ごとに分包して、与薬を行なって来た。私達が与薬していると、看護婦不足からどうしても正確な時間に与薬出来ない。また時々薬の誤りを指摘される等、患者の信用を失ってしまう場合が見られた。ますます厳しくなって行く日常看護の中で、業務を分析、整理しながら本来の患者中心の看護、総合看護を築いてゆくにはどうしたら良いのだろうか？この課題は看護者すべての願望ではなかろうか。そこで私達は問題となっていた与薬に関して、退院後も化学療法を必要とする患者が多いため、入院中から自主管理する習慣が必要では無いか？また入院前から与薬され、自主管理していた患者も多いことから、従来と異なった方法で与薬を実施してみよう。その中から患者に治療に参加しているという自覚を持たせ、さらに患者と看護婦相互間の信頼を築き上げることが出来るのでは無いかとこの研究に取りくんでみた。

研究期間（1月25日～3月10日）　研究対象、南病棟六階に入院中の患者全員。

ここで従来の与薬法を参照して下さい。

与薬に関する一考察　　（図表　A　）

従来の与薬方法



Ⅱ 実施と経過

○実施方法Ⅰ

まず患者に一週間分の薬を渡してみて、どのような反応が返って来るかという処から始めてみた。1月25日から2月1日までの一週間。対象患者15名に薬を入れる箱を取りつけ、一週間分の薬を渡した。一人一人の薬に対しては、従来どおり一回分づゝに作成してみた。食後30分に服薬の確認と除外患者の介助のために病室を巡回すること。除外する場合は、精神的、肉体的に問題のある場合、薬に問題のある場合として副腎皮質ホルモン、強心剤、利尿剤、眠剤、鎮痛剤とした。2月1日、一週間行なってみてアンケートを取ってみた。薬に対するアンケート〔1〕の内容と結果は次の表にあらわしてみた。こゝでアンケート〔1〕の表をごらん下さい。

与薬に関する一考察

アンケートとその集計　　泌尿器科看護婦一同

	アンケート〔1〕	集　計（15人より回収）
1	自分の薬を一週間分、まとめて渡された時どう思いましたか。 イ、不安だった。 ロ、めんどうなことだと思った。 ハ、自分のものだという安心感があった。 ニ、そ の 他	5　10　15人 0 4人 10人 1人　別になんとも思わない。
2	一週間行なってみてどうでしたか。 イ、飲むのをわすれた。　たびたび 時々 忘れなかった 忘れた人はなぜですか。 ロ、飲み方をまちがえた まちがえない どういうまちがいですか。	1人 14人 食事をとらなかった。食事時間がズレた時。 0 15人
3	一週間　自分で飲んでみて　どう思っていますか。 イ、めんどうである ロ、不安である。 ハ、自分で病気を治しているという意欲が湧いた。 ニ、薬に対する興味が湧いた。 ホ、そ の 他	2人 0 9人 4人

この結果から、私達の中に入院中、本来薬は看護婦の手から渡すべきでは無いかという、強い不安があったが、むしろ反対の結果が出たように思う。

○実施方法Ⅱ

このアンケートの結果から、私達が想像していた以上に患者は病気を治すことに積極的であることを知った。そこで第Ⅱ段階として、2月8日～22日までの14日間は外来患者と出来るだけ同条件のもとに薬を渡してみた。条件としては一回分ずつに分けないで種類別に入れて渡すこと。食後30分に前回と同様に服薬の確認に廻った。この段階まで来て、私達看護者側に大きな問題が出て来た。それは、それぞれの患者が服用している薬を把握出来ないこと。確認のための巡廻の意義を充分理解出来ないという問題であった。そこで薬を把握するために、医師に処方箋を二組書いてもらい、一組を私達の控えにしそれを看護日誌に貼ってみた。二番目の問題に対しては、定例の研究会に於て、与薬に対して看護婦はどうあるべきかを話し合い、その中から私達は患者に薬を正確に与えること。服薬後患者の状態を観察し異変が生じた場合には、医師に報告する義務のあることを確認しあった。

次に患者側からの反応としてはアンケート〔Ⅱ〕から次のような結果が出た。〔Ⅱ〕をごらん下さい。

アンケート〔Ⅱ〕	集　計　（12人より回収）
1　患者さんに薬を全部渡して飲んでいただく　という方法についてどう思いますか 今までの方法とくらべてみてどうか　など具体的に書いて下さい。	自分で納得して飲める。 いつ薬が来るかと待たなくて良い 飲む時間が守れる。 など　積極的な意見……9人 無　回　答……3人
2　こうしたらもっと飲みやすい　こうすべきだなど意見がありましたら書いて下さい。 イ、薬の渡し方について（毎食後ずつ袋に入れるなど）	5　10　15 5人　毎食後に分けて渡してほしい 3人　分けなくてよい 4人　飲むことに変わりはないからどちらでも良い
ロ、薬の置き場所について	7人　今の場所で良い 5人　無　解　答
ハ、薬に関する説明について （どういう薬か　など）	種類別に詳しい説明をしてほしい 何に効果があるのか　詳しく知りたい。　など全員が薬に興味を示し　もっと詳しい説明を要求

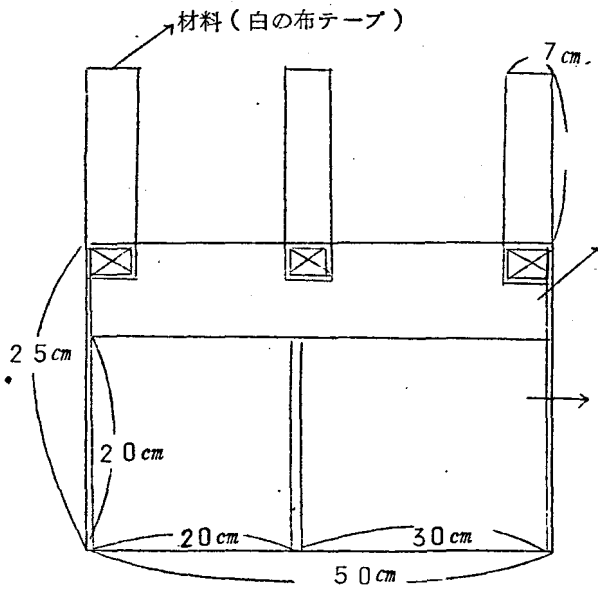
この結果から、薬の渡し方については、要望がまちまちであるけれど、毎食後ごとに作成し

て渡さないことに負担を感じている患者がいる以上、無視出来ないことである。また薬に関する説明については、全員がもっとくわしい説明を要求していることから、私達が薬の把握を充分し、教育出来るような方法を考え出すことが必要であった。

実施方法〔Ⅲ〕

以上のアンケートと研究の結果から、よりよい方法を生み出し、実施してみた。

① 薬を入れる袋の作製

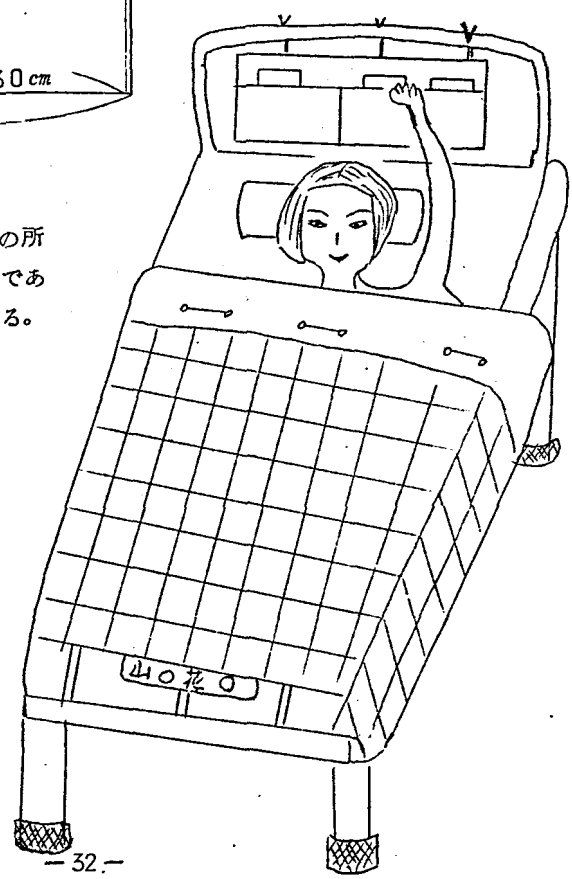


図表（B）

全体が布であるため、洗たくが出来るし、色が水色のため、部屋全体に良くマッチする。

図表（C）

とりつけ位置はベットの頭のさくの所とする。この位置は動けない患者であっても容易に取り出すことが出来る。



② 薬は一週間分を一回分づつに作成して渡す。

③ 私達が実施することでは、

○食後３０分には除外者の服薬の介助とその他の患者の服薬の確認に巡廻すること。この際、私達が薬を把握し、作用を観察し、また患者からの薬に対する質問に答えることが出来るようにするため、処方箋を入れたノートを持参すること。

○残薬が多かったことに対しては、水曜日に定期処方が書かれることから、火曜日の準夜でおのおの患者の薬の状態を詳しく確認して、調節してもらうようにする。

以上の方法を試案として実施した。

Ⅲ まとめ

以上この方法を実施してみて、まだ医師の一部に難色を示す人や理解されていない部分もあり、まだまだ多くの問題点を残しているが

① 患者にとって疑問や不安がその場ですぐ解決出来る。

② 薬理作用について認識してもらえる。

③ 残薬を少なくすることで、患者さんの経済的負担を少しでも軽くすることが出来る。

④ 誤薬が減少、もしくはみられない。

⑤ 正確に服薬出来るようになった。

という利点が得られた事から、少しはこの研究の成果が得られたと考えられる。尚、現在のところ、この問題について、完全な形の結論を出すまでには至らなかったが、今後も業務の中で、どのような在り方が効果的で科学的であるのか、引続き研究課題にしてゆくことにする。

参考文献

○ 保助看法

○ 看護学雑誌　７２年１月号。ベットサイドの看護

○ 看護学総論（与薬と看護婦の役割）